

報道関係者各位

令和4年8月25日

アーカスプロジェクト2022 いばらき | アーティスト・イン・レジデンスプログラム

アーティスト決定

3年ぶりの海外アーティスト招聘！



撮影：Michael Tsubota

アリー・ツボタ



梶原 瑞生



撮影：Roel Janssen

マリョライン・ファン・デル・ロー

今年度の公募では228件（52 各国・地域）の外国籍者からの応募と、12 件の日本国籍者からの応募があり、岡村恵子氏（東京都現代美術館 学芸員）と後藤桜子氏（水戸芸術館現代美術センター 学芸員）を審査員に迎え、アーカスプロジェクト実行委員会との審査会を経て、**アリー・ツボタ**（米国）と**梶原 瑞生**（日本）を選出しました。2021 度にオンライン・レジデンスプログラムに参加した**マリョライン・ファン・デル・ロー**（オランダ）も加えた3名のアーティストは、8月30日から12月7日までの100日間、守谷市のアーカススタジオを拠点に滞在制作に取り組みます。滞在の終盤には活動成果を発表するオープンスタジオを開催する予定です。

新型コロナウイルス感染拡大による渡航制限が緩和され、海外からの招聘アーティストをアーカススタジオに迎え入れるのは2019 年度以来、3年ぶりとなります。ぜひとも事前告知、ご取材にご協力賜りますようお願いいたします。

プログラム期間 2022 年 8 月 30 日(火)～12 月 7 日(水) 計 100 日間

応募件数 外国籍者：228 件（52 各国・地域）
日本国籍者：12 件

アリー・ツボタ Allie Tsubota

1992 年アメリカ合衆国、ニュージャージー州生まれ。マサチューセッツ州ウースター在住。ニューヨーク大学で環境学とダンスを、ロードアイランド・スクール・オブ・デザインで写真を学んだ。写真や映像、テキスト、アーカイブなどを組み合わせ、意味や記憶が形づくられる過程でさらに連関する調査に取り組み、作品を制作している。近代国家の歴史とアジア太平洋地域における人種の離散と同化に関心を寄せ、写真という特異な時間性を持つメディアを用いながら、ある人種がくぐり抜けてきた記憶をどのように目に見える形で再提示できるのかという課題に取り組んでいる。それは、写真を心理的、社会的また公的な場であると捉えることによって推し進められる。ツボタのインスタレーションは、鑑賞者を歴史に招待するとともに、歴史に対する関わりを要求する。アーカスプロジェクトの滞在では、これまでに手がけてきた《Dead Letter Room》を展開する。



(上) **Dead Letter Room** インスタレーション, 2021
(下) **Dead Letter Room** 部分

【アーカスプロジェクトでのプラン】

ツボタは、遠く離れた地で過去に起きた出来事との関係を図るために、写真やテキストなどを組み合わせて制作を行っている。日系アメリカ人でもあるツボタは、日本語を話すことはできない。しかしながら、自らの出自に刻まれている国が経験した太平洋戦争の記憶に近づくために、戦前から戦後にかけて活動した小説家で詩人の原民喜との擬似的な往復書簡を試みる。また、これまでに制作の準備を周到に行っており、太平洋戦争におけるアメリカの戦略的な爆撃に関する調査団のアーカイブを調査し、写真や映像などの資料を当たっている。

梶原 瑞生 Kajihara Mizuki

1993 年大阪府生まれ、京都市在住。京都造形芸術大学（現京都芸術大学）大学院にて現代美術を学び、音の意味を探ることに関心を寄せて制作をしている。近年では、構造が記譜によって明らかになっている西洋のクラシック音楽を主に題材とし、楽曲の歴史や作曲の経緯などをリサーチして作品を生み出している。組み立てられた楽曲の音を解体し、パフォーマンスをしたり映像を撮ったりしながら再構成することで抽象的な音を視覚化する。例えば、ウィーンでの展覧会に参加した際には、移動中に曲の構想を練ったという逸話があるモーツァルトのオペラ《ドン・ジョバンニ》の序曲をモチーフに、梶原自身もウィーンとプラハの間の300km 近い距離を自転車で移動しながらそれを再構成した。近年では「音の伝搬」に注目しながら制作を行っている。アーカスプロジェクトの滞在においては、茨城県の大洗町が発祥と言われる民謡《磯節》の再構成を試みる。



撮影：Kenryou Gu

THE LIBERTINE PUNISHED OR

Overture

Mizuki Kajihara
composed through a travel between Vienna and Prague



[アーカスプロジェクトでのプラン]

音楽や音を記号と捉えそれらが指し示す意味や行為を解きほぐして目に見えるように作品化する梶原だが、アーカスプロジェクトでは、これまでの創作の方法論を踏まえながらも、新たに我が国に伝わる民謡をモチーフに音やその伝搬について制作をするという野心的なプランに取り組む。茨城県大洗町発祥と言われる民謡『磯節』について海沿いの港町をリサーチし、地域の人々とともに詩を作り直し、民謡を再構築する。磯節が生まれた港町の人々への聞き取りや守谷での市民とのワークショップも計画している。

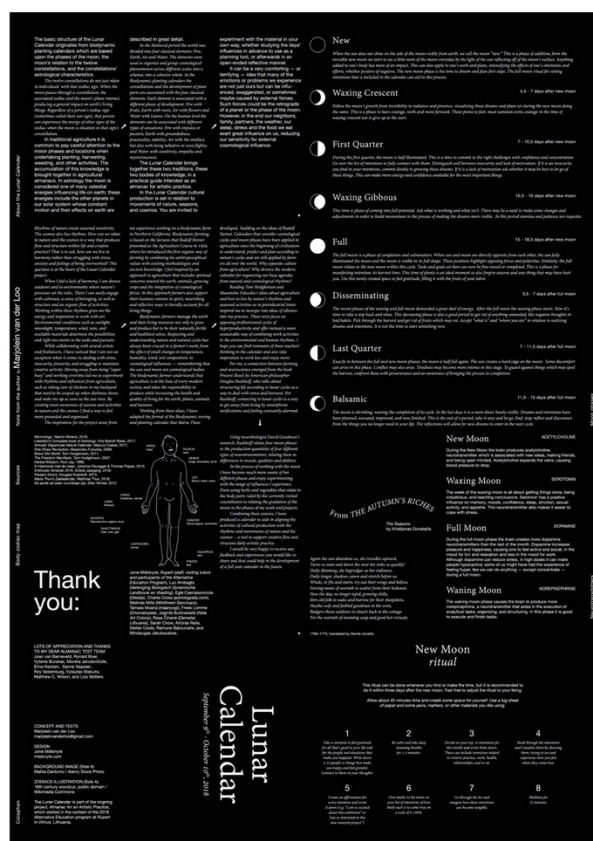
(上) 《罰せられた放蕩者または》 インスタレーション, 2019

(下) 《罰せられた放蕩者または》 部分

2021 年度からの継続支援アーティスト

マリオライン・ファン・デル・ロー Marjolein van der Loo

1987 年オランダ、ヘレーン生まれ、マーストリヒト在住。ユトレヒト大学で美術史、アールト大学（ヘルシンキ）にて、ヴィジュアル・カルチャーとキュレーションを学んだ。ファン・デル・ローはキュレーター、エデュケーターとして活動し、制作動機と方法論から近代社会を批判的に捉えるとともに、人間と自然のかかわりを結び直す試みをしている。集約的かつ排他的な近代社会のあり方への対抗として、彼女自身は他者との協働を行ったり、視覚のみならず五感を活用した展覧会制作や教育プロジェクトを実践したりする。バイオダイナミック農法に関連する薬草のお茶や料理を分かちあう教育プログラムを実行し、そのカレンダーを作品化した《Lunar Calendar》をはじめ、非人間の観点から近代社会の行く末と、人間が生き延びるための方法論を指し示すプロジェクトなどがある。



(上) **Lunar Calendar** プロジェクト, 2018
(下) **Once Upon A Time** プロジェクト, 2019

[アーカスプロジェクトでのプラン]

ファン・デル・ローは、植物の観点から人間と生態系の関係の組み直しについて取り組むため、桂の木とそれにまつわる伝説「桂男」を調べ、映像や文章などの形にして発表をする予定だ。中国より我が国に伝わった桂男は、いずれの国においても月と関係して語られる。植物にはじまり月をも視野に入れながら人間を捉えなおす試みは、人間と自然を分かち、生態系を失調させてきた近代社会と資本主義を客観的に捉えつつ、人間の行くべき道を照らし出すことだろう。

オープンスタジオ Open Studios

アーティストたちの活動の成果を発表します。

日 時：2022 年 11 月 17 日(木) — 20 日(日) 13:00-18:00 ※予定

会 場：アーカススタジオ

入 場：無料

◎ 詳細はウェブサイトでお知らせします。今後の新型コロナウイルスの感染状況によっては、イベントがオンラインへと変更になる可能性があります。

主催：アーカスプロジェクト実行委員会（茨城県、守谷市、公益財団法人茨城県国際交流協会）

助成：令和 4 年度 文化庁 アーティスト・イン・レジデンス活動支援事業



認定：公益社団法人 企業メセナ協議会



企業メセナ協議会
助成認定活動

ご取材のお申し込みは下記へお願いいたします。

お問い合わせ先

アーカススタジオ（火-土 10:00 -18:00）

〒302 - 0101 茨城県守谷市板戸井 2418 もりや学びの里内 担当 | 恩田・藤本

TEL | 0297 - 46 - 2600 E-mail | arcus@arcus-project.com Web | www.arcus-project.com